法専門家と芸術専門家の対立 ——テクスチュアル・トラベルと専門的知識——

Conflicts between Legal Professionals and Art Professionals: Textual Travel and Expertise

岡 沢 亮
OKAZAWA Ryo

This paper examines the underlying causes of conflicts between legal professionals and art professionals in legal settings. Previous studies have schematized such conflicts using abstract concepts such as habitus and power, but concrete mechanisms have yet to be elucidated. In this study, analysis of art professionals' testimonies and legal professionals' arguments in an obscenity trial in Japan revealed that a conflict arose because the legal professionals re-described the art professionals' testimonies by using legal expertise. Thus, analyzing art professionals' methods of constructing arguments and legal professionals' methods of re-describing those arguments may reveal important details of how such conflicts can arise in the legal setting.

1. 法的場面における法専門家と他領域の専門家の対立

公判のような法的場面においては、検察官などの法専門家と、証人として訴訟に参加する他領域の専門家とのあいだで、主張やその理解をめぐる対立が生じる。こうした対立のあり方は法社会学の主題となってきたが、既存研究は研究者による一般的な概念を用いた図式的なものであり、実際の場面における対立のあり方とそれが生じる仕組みに関する経験的研究は不十分だったと言える。そこで本稿は、法的場面における異なる領域の専門家の主張の構成方法を分析し、両者のあいだの対立とそれが生じる仕組みを具体的に解明することを目指す。

そのために本稿は、「芸術」作品のわいせつ性が争われた裁判を事例として取り上げる。こうした裁判は、芸術専門家が弁護側証人として法的場面に参与する点において、また日本における他の多くの裁判と異なり公判記録が公刊されており、芸術専門家と法専門家双方の法廷における主張を検討できる点において、本稿で取り上げるに値する。

芸術専門家証人は争点となった作品について証言を行うわけだが、そこで問題になるのが、彼らが証言した多様な論点を、法専門家である検察側が論告において再記述する際に生じる対立である。公判における証言が、論告という別の法的場面のなかで参照される際に、元の証言のなかのいくつかの論点が抜け落ちたり、別様に理解されたりする。それによって、元々の芸術専門家の主張と法専門家によるその主張の再記述とのあいだに齟齬が生じ、両者の主張とその理解をめぐる対立が現れる。本稿は、特にこうした法的場面における両者の対立のあり方に焦点を当てる。

本稿の構成は次である。まず、法専門家と他領域の専門家の対立に関する先行研究を検討し、研究者による一般的な概念に基づく記述の問題点を指摘する(2章)。こうした問題点を克服するためには、専門家証人の主張の構成方法と、法専門家によるその再記述の

方法の分析が必要であると述べる（3章）。この方針に基づき、日本の『悪徳の栄え』事件における弁護側の芸術専門家証人たちの証言を分析し（4章）、法専門家である検察官によるそれらの証言の再記述の方法を分析する（5章）。分析を踏まえて、両者のあいだの対立が生じる仕組みについて考察する（6章）。最後に結論を述べる（7章）。

2. 先行研究の検討

法社会学や、より広く法と社会の関係をめぐる先行研究においては、法的場面において法専門家と他領域の専門家のあいだに生じる対立についての検討が行われてきた。

シーラ・ジャサノフ [Jasanoff 1995=2015] は、アメリカ司法における科学技術に関する知識の使用に焦点を当てたうえで、法専門家による科学的知識の使用の仕方が、当の科学者たちからみて不適切だとされることがあると指摘する。科学的主張をどのように理解するかをめぐって、法専門家と科学専門家のあいだに対立が生じうるのだ。

また、本稿のトピックである法専門家と芸術専門家との関係について論じる中河 [2003] は、人々が特定の社会問題に関するクレーム申し立てを法的な場に持ち込む際には、法的な場に使用可能なものへと「翻訳」しなければならないことに注目している。法的な思考や語彙に則って、法的に望ましい結果が得られる可能性を最大化させるために、自分たちの陣営の議論を組み立てる必要があるというわけだ。そのなかで特に、当該作品についての作品論や芸術の役割に関する芸術家や批評家など芸術専門家の議論は、法的なクレームへのくみ上げが困難であったことを述べている。

これらの研究において示唆されているのは、法的場面における法専門家と他領域の専門家のあいだの主張やその理解をめぐる対立は、両者が用いる専門的知識の差異と関連して生じることだ。

この点について和田 [2014] は、法専門家と被害者そして医療専門家が参与する医療過誤訴訟をとりあげ検討を加えている。

被害者側は、情緒的な欲求に根差した被害の物語の一部としての「真相究明」を求めている。他方、医療者側は「医学の物語」「医療現場の物語」に根差した医学的原因究明として「真相究明」を認識している。しかし、法専門家にとっては、これらを勘案しつつも、法的効果を導くために必要とされる「要件」に関わる事実を確定することこそが「真相究明」にほかならない。

[和田 2014 : 150]

和田は、同じ「真相究明」という概念について、複数の訴訟当事者によって理解が異なるという見立てを提示している。特に医療過誤訴訟における複数の専門家について言えば、医療者は医学的知識や医療現場の専門的知識に基づいた真実を探究しようとするのに対して、法専門家たちは「過失」や「損害賠償」などの法的な語彙と枠組みのもとで問題を把握し「事実認定」を行い、その解決を試みるという。それゆえに、医療の専門家が重視するような科学的事実や医療現場の実情は無視されることになってしまう。

このように和田は、異なる領域の専門家による主張構成の差異に、両者の対立の原因を見出している。そのうえで、「言説的ハビトゥス」や異なる「範型的ナラティブ」の共約不可能性があるなかで、法専門家による法的な物語の「権力」の作動によって、法専門家と他領域の専門家との対立が生じると述べている。

すなわち、共約不能な「被害」の物語が、法的物語の土俵に上げられると、実際に、そこで生

起するのは、権力的な物語の支配・抑圧の過程であることが多い。法は当事者が語る正義を守るどころか、当事者の正義の物語を否定し、法という知の体系が紡ぎだす限定された正義の物語を押し付ける。
[和田 2014: 152]

こうした議論は、法廷における異なる領域の専門家のあいだの対立について、ある種の見通しを与えてくれる。しかし、「言説的ハビトゥス」や「範型的ナラティヴ」の異なり、あるいは法的なものの「権力」といった研究者による一般的な概念によって、対立の発生を理論化するだけでは、見落とされてしまう部分もある。

まず、研究者の一般的な概念によって特徴づけられている異なる訴訟当事者の主張の構成方法が、どのようなものであったのかが具体的に明らかではない。和田の議論は、法専門家は「過失」などの法的語彙を用いるのに対し、医療専門家は医療現場の事情を重視するといった概説を行っているが、事例の分析に基づいてこれらの主張の特徴の差異が明らかにされているわけではない。特にそこでは、他領域の専門家であっても、自らの専門性を法的場面に適切なかたちで使用すべく主張を構成しようとするのが、見過ごされてしまっている。こうしたそれぞれの専門性に基づく法的場面での主張の特徴を把握するためには、両専門家による「言説的ハビトゥス」や「範型的ナラティヴ」と呼ばれうるものを、研究者が措定する彼らの専門性のあり方から推論するのではなく、彼らの主張とそこで用いられる専門的知識に関する具体的な分析を通じて明らかにすることが必要になる。

加えて、分析の欠如ゆえに、「権力」という過度に一般的な概念を用いることによって、両者のあいだの対立を記述する議論の組み立てになっている。しかし、法が当事者の「物語」を「否定」し、法の「物語」を「押し付ける」といった記述は、実際のところ法専門家によってどのような実践が行われ、そこで他の訴訟当事者による主張はどのように扱われていたのかについて、明瞭な理解を与えてはくれない。法専門家の側でも、対立する立場の証人である他領域の専門家の証言を「否定」する際には、それを説得的に行う必要があるし、そうした証言を踏まえた上で自らの主張を説得的に正当化しなければならない。和田による「権力」概念を用いた議論は、いかにして法専門家が他領域の専門家証人の証言に反駁し、自らの主張を正当化しているのかを解明していないのである⁽¹⁾。

これらの問題点を鑑みるならば、法的場面における他領域の専門家の主張の構成と、法専門家によるその主張への対処の方法を、経験的な素材に基づき分析することが必要だ。

3. 方法論的検討——テクスチュアル・トラベルと法専門家による再記述

そこで有効と考えられるのが、テクスチュアル・トラベルという概念だ。これは、社会生活や社会制度におけるテキストの移動や変化を名指すために用いられる概念である。この概念は、テキストが制度的プロセスのなかでいかにして移動するのか、またそのプロセスのなかでいかにして形成、変更、利用されるのかへの着目を可能にする [Heffer et al. 2013]。重要なのは、あるテキストは、制度的プロセスの特定の局面で生成され、のちに脱文脈化されて用いられることもあれば、さらに制度的プロセスの別の局面において再文脈化されて用いられることもあることだ。

法制度についてこうした現象の例を挙げる。たとえば警察の被疑者に対する尋問によって得られた調書というテキストは、法廷において弁護人や検察官といった別の法専門家に用いられうる。そのとき、そのテキストは尋問という当初の文脈から切り離され、再解釈されうる。あるいは、下級審の公判での証人の証言は、記録されたのちに上級審の公判に

において弁護士や検察官に当初の証言の意図とは異なるかたちで理解され、さらに裁判官の判決においてはまた別の文脈の下で参照されることがある。こうした制度におけるテキストの移動と変化が、テクスチュアル・トラベルという概念のもとで把握される現象である。この現象に焦点を当てることで、法的場面において他領域の専門家証人がいかにして証言を構成し、法専門家はその証言をいかにして扱っていたのかをとらえられる。

特に法専門家による証人の証言への対処について考察するために重要と考えられるのが、法専門家による再記述の実践を分析することだ。なぜなら、芸術専門家証人の証言を法専門家が再記述することで、元々の芸術専門家の主張と法専門家によるその主張の再記述とのあいだに齟齬が生じ、両者の対立が生じることになると考えられるからである。

こうした再記述実践への着目の有効性は、先行研究でも示唆されている。たとえば、専門家証人の証言ではないが、Ehrlich [2013] や小宮 [2011] は、性暴力をめぐる刑事裁判を事例としてとりあげ、被害者の主張の構成と、裁判官などの法専門家を含む訴訟関係者によるその再記述を分析している。そこでは、被害者の当初の主張が、法廷において再記述されることによって、異なる意味内容を持つ主張として理解されることになり、結果的に被害者の側の主張が退けられていくプロセスが明らかにされている。

さらにLynch [2015] は、進化論に反する創造論 (Creationism) を公立校で教えることの可否をめぐる裁判において、科学哲学・科学社会学者のスティーヴ・フラーが専門家証人として行った証言について分析を行っている。フラーは尋問において、インテリジェント・デザイン⁽²⁾という発想は創造論と歴史的に関わっているが、それらは現在では大きく異なっている旨を証言した。しかしその証言は、続く裁判の展開のなかで「インテリジェント・デザインは創造論である」という主張として尋問者に再記述され、むしろ対立する立場の主張を支持する証拠として用いられるようになったというのである。

これらの研究は、テクスチュアル・トラベルに着目した、証人の主張構成と法専門家によるその再記述の実践の分析としてとらえることができる。本稿もまた、芸術専門家の主張の構成と、法専門家によるその再記述の実践の分析を通じて、両者の主張とその理解をめぐる対立がいかにして生じているのかを解明することを目指す。

4. 分析1——芸術専門家証人の主張構成

本稿で取り上げるのは、名だたる芸術専門家、特に文学の専門家が証人として召喚されたことで有名な裁判の公判である。具体的には、マルキ・ド・サドの小説『悪徳の栄え』の訳書のわいせつ性が刑法175条のもとで争われ、最高裁において訳者の澁澤龍彦と出版社社長の石井恭二に対して有罪判決が下された、いわゆる悪徳の栄え事件を取り上げる。なかでも、一審判決に至るまでの公判を分析対象とする。資料としては、公判における検察官・弁護士・証人などの相互行為と検察論告や判決などの諸テキストが収められた公判記録である現代思潮社編集部編 [[1963] 2010a, [1963] 2010b] を使用する。

はじめに、第5回公判における小説家・翻訳家の大岡昇平証人の議論を見ていきたい。大岡は「春本的なものを猥褻と考えていいです。つまりそれをいたづらに劣情を刺激して、それによって自分が利益を得ると、こういう考え方、これがやっぱり猥褻性というものを認めるについて重要」[現代思潮社編集部編 [1963] 2010a: 182] と述べている。また大岡は、『悪徳の栄え』と春本との関係について、大野弁護士による尋問において次のように主張している。

大野 証人はこの本をお読みになって、非常に世俗的によく言われている春本という種類のものと何か異なる点をお感じになりましたか。

大岡 ……つまりサドは、真実ということをあらわすために筆をとっているのであって、しばしばその描写が荒唐無稽に陥るほどに真実ということを、こういうこともある、こういうこともある、牢獄から主に空想によって書きあらわした部分もあります。

ある場合は冗談をいって人をからかっているような描写もあると思いますが、これに反して春本というのは明らかに読む人の性感を刺激して、それによってたのしみを与えて、そのことによって人に読まれ、あるいは買われる、で、自分がお金を儲けるという目的のもとに出版されているので、もっぱら読者の性感を刺激するという立場から書かれている。

で、今申し上げましたようにサドの描写は真実だけを目指しておりますから、非常にぶっきらぼうで簡単であります。

だけどその春本は、もう少し日常の範囲の中で行われる大体実現可能な乱行〔原文ママ〕とかいうようなことも出て参りますが、サドのような空想的なものでなく、大体実現可能な範囲で書きあらわすというのが春本の趣旨というふうに考えております。

〔現代思潮社編集部編〔1963〕2010a：170-171〕

まず大野弁護人は、具体的作品である『悪徳の栄え』と、春本というジャンルに属するような作品群との差異について質問している。それに対して大岡は、春本は専ら性的な刺激と楽しみを読者に与えるのに対して、サドの作品は読者をからかって笑わせるような部分もあり、かつ真理を示そうとする作品だと返答する。あるいは、春本の性描写は実現可能性があるのに対して、サドの作品のそれは荒唐無稽で空想のようなものだという。

また大岡は、「真実ということをあらわすために筆をとっている」や「牢獄から主に空想によって書きあらわした」という記述に見られるように、サドの執筆動機や伝記的事実など、サドに関する専門的知識を述べ、自らが文学や芸術の専門家であることを示している。

そのうえで続けて大岡は『悪徳の栄え』のわいせつ性を否定する主張を、次のような仕方で行っている。

大野 今、証人は春本というのは読者を刺激する、つまり性欲なりそういうものを刺激する、そのために書かれていると言われましたが、そういう角度からみてこの『悪徳の栄え』全編を通じて非常に長々しい議論があるわけですが、これはどのような効果をもつものでございますか。

大岡 それは常に性愛描写の間にそういう思想の描写が入りますから、これはつまり性感をむしろ減少し、興味をそぐという効果を持つと思います。

また性愛描写自身も非常に興味をそぐような描写だろうと思います。

大野 それは今言われたように実現不能の非現実的なものだからという趣旨ですか。

大岡 ええ、そうでございます。

〔現代思潮社編集部編〔1963〕2010a：171〕

大岡は、大野の確認の求めに応じるなかで、『悪徳の栄え』における性愛描写は非現実的であるから刺激が少ないとしている。そして、一つ前の引用部にあったように、こうした非現実性はサドの思想や執筆動機の表れだという。大岡は、文学的思想的価値がある作品はわいせつでない、という直接的な主張を行っているわけではない。そうではなく、空想をも用いて真実を表すというサドの独特な思想は、その描写の非現実性に体现されており、その非現実性によって性的刺激は低減されるという論理になっている。大岡にとって、『悪徳の栄え』における思想性と非わいせつ性は直接に関連しているのではなく、前者からくる描写の非現実性に媒介されている。

続いて、第6回公判での文芸評論家の大井広介証人の議論を検討する。大井もまた、大

野弁護人から『悪徳の栄え』の性的な記述とわいせつ本あるいは春本とが異なっているか尋ねられるが、その際に次のように答えている。

大井 私にはまるで違うものだと思います。普通の猥褻本というのは……劣情をそそるために、非常にセックスに対して無条件に肯定的に書くと、そしてみんなそれを読むと、何も猥褻の読者というのはこんな分厚い面白くない本を、高い金を出して買わなくても、文学に縁もゆかりもない人が、私、結構読むんだと思うのです。そういう人の対象になるものは、本当に卑俗な、その人たちをおもねた悪写真、写真でセックスを非常に肯定しているところが特色だと思うのです。ところがこのサドの場合はセックスを肯定しておりませんし、非常に否定的に無味乾燥に書いておって、これで私は劣情を刺激されるような人がいるとしたら、その人は私は精神病のお医者さんに鑑定してもらわなければいけないんじゃないかと、それからごらんの通り、該当箇所というのはみんな直接の描写というのを避けていますし、全く似て非なるものだと思うのでございます。

[現代思潮社編集部編 [1963] 2010a : 252-253]

大岡と同じく、大井もまた『悪徳の栄え』という個別作品の特徴に焦点を当てた上で、それを春本と呼ばれるような作品群と比較している。彼によれば、春本はセックスを写実的かつ肯定的に書くのに対して、『悪徳の栄え』はそれを無味乾燥かつ否定的に描写しているという。さらに、『悪徳の栄え』のわいせつ性が疑われる箇所は、いずれも直接的な描写はなされていないというのである。このようにして、読者が性的な刺激を受けることは考えにくいという主張の正当化が試みられている。

もちろん、春本は「文学に縁もゆかりもない人」が読むという主張は、翻って『悪徳の栄え』は文学作品だという考えを示唆しているとも解釈可能である。しかし、ここでもまた、『悪徳の栄え』が文学であることと性的刺激がないことは、そのまま前者が後者の原因や理由になるかたちで結び付けられているわけではない。むしろ、直接的な描写の回避やセックスに関する記述の無味乾燥さをもって、性的刺激がないことが主張されている。「性的刺激」が描写の「直接性」と結びついているのに対して、描写の「無味乾燥さ」とは結びつかないという常識的な概念連関が、改めて言及されながら用いられている。

さらに、第8回公判での文芸評論家中村光夫の証言を見ていきたい。

中村 [弁護人] ちょっと話が抽象的になりますが、この種の文学的な価値のある書物を、猥褻出版物ということで起訴され、あるいは処罰されるということについて一般的なお考えはどういうことでございますか。

中村 [証人] そうですね。それはあまり部分ばかりみて全部の思想をないがしろにされては困るというようなのが僕らの職業的立場で、そういう気がしますけれども、何といえますか、サドの場合はその部分のむしろ残虐である、それから反人道的であるけれども、猥褻というにはあたらないというような気がするんですがね。

[現代思潮社編集部編 [1963] 2010b : 12]

ここで弁護人は一般的な問題として「文学的な価値のある書物」がわいせつとされ法的規制の対象となることについての考えを尋ねている。しかし、それに対して中村は、こうした一般的な問題について返答するというよりはむしろ、「サドの場合は」と個別事例に限定をかたちで返答し、『悪徳の栄え』という具体的な作品のわいせつ性を否定する。

そのうえで、「僕らの職業的立場」と自らが文学や芸術の専門性を持つ者であることに直接的に言及したうえで、作品の部分だけではなく全体の思想を見るべきだとする作品解

積の立場を提示する。作品の全体を考慮すべきだという言明は、芸術作品をどのように見るべきかをめぐる専門的知識として提示されているのである。

また中村は続くやりとりのなかで、『悪徳の栄え』の思想的側面について言及し、それが「理屈ばかりいい」点で性愛小説やわいせつな本とは異なると述べ、その理屈の多さとサドの思想が関係していると述べている〔現代思潮社編集部編〔1963〕2010b：13〕。しかし中村は、思想書だという単一の理由から、わいせつでないことを正当化しているわけではない。そうではなく中村は、残虐であるという記述の方が、わいせつであるという記述よりも適切だと主張している。中村は検察官から『悪徳の栄え』について「客観的に性的興奮を感じるかどうか」を尋ねられた際にも、残酷さは感じるがわいせつではなく、書かれた内容が実行不可能であると指摘している〔現代思潮社編集部編〔1963〕2010b：16〕。このように、具体的な描写の特徴である残虐性に言及しながら、中村は『悪徳の栄え』のわいせつ性を否定しているのである。

まとめておこう。公判において芸術専門家証人たちは、第1に、『悪徳の栄え』という個別作品あるいはサドという個別具体的な作者の作品を、春本というジャンルに収まるような作品群と比較していた。第2に、『悪徳の栄え』がわいせつでないという主張を展開するにあたって、文学性や思想性ゆえにわいせつではない、という直接的な正当化ではなく、より多様な根拠を用いた正当化を行っていた。大岡は、サドの独特な思想からくる描写の非現実性が、性的刺激を失わせているとした。大井は文学的価値に言及しつつも、そこから直接的にわいせつ性を否定するのではなく、直接的な性的描写の欠如あるいは単調さから作品に性的刺激がないことを正当化していた。中村は描写の残虐さに焦点化し、作品への評価や記述として「残虐」の方が「わいせつ」よりも適切であると主張していた。

では、こうした公判における芸術専門家証人の証言は、いかにして法専門家に再記述されたのだろうか。検察官による論告を分析することによって、この問題に取り組みたい。

5. 分析2——法専門家による再記述実践

第15回公判における検察論告において、検察側は当該作品が全体として文学的思想的に価値ある作品であることを認めつつも（〔現代思潮社編集部編〔1963〕2010b：156〕）、具体的に作中の14箇所をあげながら、作品が性的な場面を現実的、具体的、かつ露骨に描写していることを述べ、そのわいせつ性を主張している（〔現代思潮社編集部編〔1963〕2010b：162〕）。

このことを踏まえた上で、テクスチュアル・トラベルという現象に焦点を当て、法専門家と芸術専門家の対立を検討しようとする本稿の問題関心から重要になるのは、検察側がわいせつ性の積極的主張を行うのみならず、弁護側の芸術専門家証人の主張を再記述し反駁する方法である。検察側は、次のように議論を展開している。

弁護人申請の各証人はいわゆる作家あるいは評論家の大岡昇平、奥野健男、大井広介、中村光夫、中島健蔵の各証人ならびに作家評論家以外の証人とも、一般に、猥褻文書概念を、「人の性的興味刺激に訴えることを意図したもの」とか「人の劣情を刺激させることを目的としたもの」とし、いわゆる春本といわれるもののみを猥褻文書と考え、文学的、思想的に価値ある作品は猥褻文書たり得ないとする立場に立つものと認められ、また大岡証人、中島証人は明らかにチャタレー判決の判旨に承服できないとする見解に立つことを証言しているのであるが、これらの立場や見解を採用できないことは前述したとおりである。

次に、本書の記述する性的行為が、時間的にも数量的にもものすごい乱交であること、普通の人の行い得ない性的行為であること、残虐行為を伴うものであること、性器の描写が実際にありえないものであることなどから、それが猥褻性を持たないとされる見解もあるが、本書の性的行為の記述の全部がそうであるとは言えないのみならず、これらのことがあるからといって、それが猥褻文書の要件を否定するものということとはできない。

[現代思潮社編集部編 [1963] 2010b : 173]

まず、前章で検討した大岡や大井や中村の証言は、春本のみをわいせつとし、文学的思想的価値のある作品はわいせつではないとする主張として再記述されたうえで、否定されている。そのうえで当該作品についての「普通の人の行い得ない性的行為であること、残虐行為を伴うものであること、性器の描写が実際にありえないものであることなどから、それが猥褻性を持たないとされる見解」が紹介され、これらもまた否定されている。

ここでは、法専門家による芸術専門家証人たちの証言の再記述の方法を見てとることができる。まず、芸術専門家証人たちの個別作品に対する主張は、一般的な主張として再記述されている。そもそも芸術専門家証人たちの主張は、春本というジャンルと思想書や文学書というジャンル一般を比較するというよりはむしろ、『悪徳の栄え』やサドという作者による個別作品を、春本というジャンルに属する作品群と比較するものだった。しかし検察論告において、これらの主張は春本と文学書や思想書という一般的な作品ジャンル同士の比較をめぐる主張として再記述されているのである。

また、上述の再記述の方法と深く関連しているが、大岡による性的描写の非現実性の指摘（「普通の人の行い得ない性的行為」）のように、わいせつ性を否定するために芸術専門家証人が用いた論点は、上記の思想性や文学性に関する議論と区別されて論じられている。前章で見たように、大岡はサドの思想性が描写の非現実性と関連しており、その非現実性ゆえにわいせつでないという主張を展開していた。しかし、法専門家である検察官による再記述においては、こうした主張は、思想性や文学性からわいせつ性を否定する主張（上記引用部一段落目）と、描写の非現実性によってわいせつ性を否定する議論（上記引用部二段落目）とに分割されている。特に大岡の主張は、上記引用部の直後でも「本書は性行為の描写の間に思想の描写が入るから性欲をむしろ減少する（大岡証人）」[現代思潮社編集部編 [1963] 2010b : 173] とあるように、思想性と非わいせつ性を直接的に結びつける議論として、証言全体の文脈から切り離され、一部分だけが抜き出されるかたちで再記述されている。

つまり検察論告は、『悪徳の栄え』のわいせつ性を否定する芸術専門家証人たちの主張を、単に否定しただけではなかった。そうではなく検察側は、芸術専門家証人たちの証言を、春本と文学書や思想書一般とを比較したうえで、「文学的、思想的に価値ある作品は猥褻文書たり得ない」とする主張として再記述していた。そして、思想性や文学性とわいせつ性との両立可能性を根拠に、再記述された主張に反駁するかたちで、『悪徳の栄え』がわいせつでないとする弁護側の議論を否定していたのである。

なお、こうした法専門家による再記述とそれに対する反駁は、その後の第16回公判における芸術専門家たちの主張構成にも影響を与えることになる。例えば特別弁護人であり作家の埴谷雄高は、検察官による思想性・文学性とわいせつ性の両立という議論を否定したうえで、「思想性と文学性を備えた作品は、わいせつ性など発動する余地がないところの或る緊密な内容が詰まった堅固な実質にほかならない」[現代思潮社編集部編 [1963]

2010b：220]と述べる。ここで弁護側の芸術専門家は、検察官による文学性・思想性とわいせつ性の両立可能性の主張に対し、両者の両立不可能性を主張するかたちで反駁している。すなわち、検察官によって再記述され弁護側証人に帰属された主張を繰り返すかたちで、芸術専門家である特別弁護人は主張を組み立てているのである。

このように、まづ法専門家である検察官と弁護側の芸術専門家のあいだには、作品のわいせつ性の有無をめぐる主張の対立があった。加えて法専門家は、芸術専門家証人による個別作品のわいせつ性を否定する主張を、文学書や思想書はわいせつな春本ではないとする一般的水準での作品ジャンルの関係をめぐる主張として再記述したうえで、文学性・思想性とわいせつ性の両立可能性の議論に基づきそれに反駁した。ここでは、芸術専門家証人の主張を個別作品に関する主張として理解するか、一般的な作品ジャンルに関する主張として理解するかという、主張の理解をめぐる対立も生じていたのだ。そして、こうした検察の主張に対し弁護側の芸術専門家は、文学性・思想性とわいせつ性の両立不可能性を主張し反駁を試みていた。ここにきて両者の主張の対立は、検察側が再記述に基づき設定した、文学性・思想性とわいせつ性が両立可能か否かというものになっていたのである。

6. 考察——専門的知識の使用をめぐる

以下では分析を踏まえ、芸術専門家と法専門家による主張やその再記述の方法について考察する。まず、検察側の再記述の方法とそれが持つ意味について検討する。重要なのは、芸術専門家証人の証言を、個別作品についてではなく一般的な水準において思想性や文学性から直接的にわいせつ性を否定する主張として再記述することは、検察側にとって作品のわいせつ性と有罪を主張するための有効な指し手になっていることだ。

検察論告において再記述された立場は、既存の判例と関連の深いものだ。悪徳の栄え事件以前のチャタレー事件判決（最大判昭和32・3・13）において、法的なわいせつ概念の3要件として、徒らに性欲を興奮又は刺激せしめ、普通人の正常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義観念に反する、が挙げられるとともに、芸術性とわいせつ性は両立するという議論が展開された。悪徳の栄え事件の論告において検察側は、この判例に言及し「前記大法廷判決が明示しているように、文学性思想性と猥褻性とは別異の次元に属する概念であって両立し得ないものではない」[現代思潮社編集部編[1963] 2010b：156]と述べている。この判例の参照によって、再記述された芸術専門家証人の証言に対して反駁することが可能になる。

すなわち検察側は、証人の証言を芸術性とわいせつ性の両立不可能性を一般的水準で主張するものとして再記述することによって、判例における芸術性とわいせつ性の両立可能性に関する議論を参照し、そうした主張を端的に斥けることができるようになる。このように、法専門家である検察側による芸術専門家証人の証言の再記述は、彼らの証言を判例においてすでに挙げられている論点に落とし込むかたちで記述し直したものだ。検察側は証言に含まれていた多様な論点を捨象し、証言を判例に関連づけるという方法のもとで再記述を行うことで、それに対する反駁も容易になる。ここでは、判例という法に関する専門的知識の使用に基づく再記述の方法が採用されているのである。

続いて、芸術専門家証人の主張の構成方法について検討する。彼らは弁護側の証人として召喚されており、当該作品のわいせつ性を否定するために、作品や作者に関する様々な専門的知識を利用しようとする。彼らは春本と『悪徳の栄え』を比較し、後者の残虐性の

高さやそれと関連する性的刺激の低さを主張する。しかしそれだけではなく『悪徳の栄え』が文学書であり思想書であることも示唆している。このように当該作品のわいせつ性を否定する議論のなかで、芸術専門家証人たちは専門的知識を用いてその作品の思想的側面や文学的価値、描写の諸特徴など様々な側面に言及することになる。

実際のところ、どのような側面に焦点化した主張がわいせつ性を否定する正当な主張として裁判官に受け入れられるかは、必ずしも事前に予想がつくわけではないだろう。それゆえに彼らは様々な専門的知識を資源として投入し、結果的に様々な論点を含む主張を構成し展開することになりうる。その結果として、既存の判例の枠組みに入りうる論点を部分的に含むような主張を行うことになると考えられる。

すなわち、一方で芸術専門家証人たちは、作者の動機や伝記的事実、作品解釈の方法など芸術に関する様々な専門的知識を用いて、作品のわいせつ性を否定する。それゆえに、その論点のなかには既存の判例に近いようなものも部分的に含まれやすい。他方で法専門家は、自らの主張の構成を見据えて、具体性を捨象し判例における既存の論点に関連づけやすい一般的主張とするかたちで、芸術専門家証人の証言を再記述する。

芸術専門家の主張の構成方法と、法専門家によるその再記述の方法は、両者が用いる専門的知識と関わりながら異なる特徴を持つ。この差異を利用した法専門家による再記述の実践によって、両者のあいだに主張とその理解をめぐる対立が生じていると考えられるのである。

7. おわりに

本稿では、法廷における異なる領域の専門家のあいだの主張やその理解をめぐる対立がいかにして生じるのかを、作品のわいせつ性が争われた裁判における法専門家と芸術専門家との関係に着目して明らかにすることを目指した。

『悪徳の栄え』事件において、芸術専門家証人は春本と『悪徳の栄え』という個別作品を比較した上で、思想性や文学性と非わいせつ性とを直接的に結びつけるのではなく、他の様々な根拠から作品のわいせつ性を否定する仕方でも主張を構成していた。それに対して、法専門家である検察官は、論告においてそれらの証言を、春本と文学書や思想書とを比較し「文学的、思想的に価値ある作品は猥褻文書たり得ない」とする一般的主張として再記述していた。そして、続く公判において弁護側の芸術専門家は、検察側の文学性・思想性とわいせつ性の両立可能性の主張に対して、両者の両立不可能性を積極的に主張していた。ここにきて両者の主張の対立は、一般的にわいせつ性と文学性・思想性が両立可能か否かという、法専門家側が芸術専門家側の主張の再記述に基づいて設定したものとなっていたのである。

分析を踏まえると、法専門家と芸術専門家との対立は、次のような両者の主張構成と再記述の方法の差異から生じていると考えられる。一方で芸術専門家証人は、作者の動機や伝記的事実、作品解釈の方法など芸術に関する専門的知識を用いて様々な論点を組み入れるため、その主張には既存の判例と近い論点が含まれやすい。他方で法専門家は、判例に基づいた反駁を容易にすべく、芸術専門家たちの証言を判例における既存の論点に落とし込み一般化するかたちで再記述する。このように、芸術専門家の主張の構成方法と、法専門家によるその再記述の方法は、両者の専門的知識の差異と関連して異なっている。そして、こうした差異とそれを利用する法専門家による再記述の実践によって、両者のあい

だの主張とその理解をめぐる対立が生じているのである。

本稿は、先行研究が論じてきたような、法的場面における法専門家と他領域の専門家のあいだの「範型的ナラティヴ」や「言説的ハビトゥス」の異なり、あるいは法専門家の「権力」による他の訴訟当事者の主張の抑圧、といった見方を正面から否定するものではない。しかし、これらの研究者による一般的な概念を用いた記述は、実際のところ両者の主張はどのように異なっているのか、法専門家はいかにして他領域の専門家に対して反駁を行っているのかを明らかにしてはくれない。この点において、両者の対立が生じる仕組みに関して不明瞭な点が残ってしまう。

これまでの議論を踏まえるならば、「範型的ナラティヴ」や「権力」といった研究者による一般的な概念で当の現象を記述するかどうかは、二次的な問題に過ぎない。むしろ、両者の対立のあり方を明らかにするために重要なのは、自らの専門的知識を用いて主張を構成する他領域の専門家証人の方法と、法の専門的知識を用いてその主張を再記述し、異なる理解可能性を与えた上で反駁する法専門家の方法を分析することだ。このような訴訟当事者の実践に即した分析こそが、法的場面において今後も生じるであろう、異なる領域の専門家のあいだで生じる対立について解明し考察するために必要なのである。

註

- (1) 社会学における権力概念の問題点については、西阪 [1988] も参照のこと。
- (2) Lynch [2015] によれば、インテリジェント・デザイン論者は、創造論者のように聖書を文字どおりに解釈することを避け、複雑系の理論やその他現代的と思われる科学的議論を用いて、ダーウィンの進化論が眼や鞭毛などの複雑な器官のメカニズムを説明できていないことを強調する。そのうえで、そうした精巧な自然界は、何らかの知性によって設計されたものだとする。

文献

- Ehrlich, Susan 2013 "Post-Penetration Rape and the Decontextualization of Witness Testimony," Chris Heffer, Frances Rock and John Conley (eds.) *Legal-Lay Communication: Textual Travels in the Law*. Oxford University Press. pp. 189-205.
- 現代思潮社編集部編 [1963] 2010a『サド裁判 上』現代思潮新社。
- [1963] 2010b『サド裁判 下』現代思潮新社。
- Heffer, Chris, Frances Rock and John Conley (eds.) 2013 *Legal-Lay Communication: Textual Travels in the Law*. Oxford University Press.
- Jasanoff, Sheila 1995 *Science at the Bar: Law, Science, and Technology in America*. Harvard University Press. = 2015 渡辺千原・吉良貴之 (監訳)『法廷に立つ科学——「法と科学」入門』勁草書房。
- 小宮友根 2011『実践の中のジェンダー——法システムの社会的記述』新曜社。
- Lynch, Michael 2015 "Turning a Witness: The Textual and Interactional Production of a Statement in Adversarial Testimony," Baudouin Dupret, Michael Lynch and Tim Berard (eds.) *Law at Work: Studies in Legal Ethnomethods*. Oxford University Press. pp. 163-189.
- 中河伸俊 2003『『翻訳』と法的現実のモザイク——クレーム申し立てアプローチの立場から』『法社会学』58: 79-97.
- 西阪仰 1988「非公式権力」『理論と方法』3(2): 49-68.
- 和田仁孝 2014「法と共約不可能性——『被害』のナラティヴと権力性をめぐって」和田仁孝・樫村志郎・阿部昌樹・船越資品 (編)『法の観察——法と社会の批判的再構築に向けて』法律文化社 pp. 137-158.

(東京大学大学院学際情報学府博士課程 boiledend0320@gmail.com)